

4. 玖西盆地の伝統行事にみる歴史的風致

(1) はじめに

地理的には国道2号と島田川水系が交わり、米作りの中心的役割を担ってきた玖西盆地。江戸時代には、吉川家領地と毛利家本藩の領地が併存していることによって、特殊な文化を育んできました。

毛利家本藩の領地として代官所や宿場町として栄えた高森地域には、高森天満宮や相杜八幡宮等の祭りを中心とした神事が現在においても賑やかに行われています。

吉川家領の中の米作りの中心を担ってきた玖西盆地においても、国道2号北側の玖珂地域では、比叡神社や玖珂・岩隈八幡宮においては神楽が舞われています。

また国道2号南側に位置する祖生地区においては、約20mにも及ぶ高さを誇る松の松明に火を灯す柱松の行事は、盆の時期に江戸時代から現在まで続いています。

このように玖西盆地には、宿場町の町人文化だけでなく、米作りの祈願と感謝、先祖の供養といったさまざまな伝統行事が現在も息づいています。

(2) 玖西盆地の伝統行事に関わるまちなみ・集落と建造物

1) 玖西盆地の伝統行事に関わるまちなみ・集落

玖西盆地は、周囲を山々に囲まれた島田川の流域に広がる田園環境と市街地で形成されています。

吉川領の宿場町として栄えた玖珂宿と毛利本藩の宿場町として栄えた高森宿は、明治時代以降も岩国と徳山を繋ぐ交通の要所や輸送拠点として繁栄したことから活用が進み、多くの商家や民家等の建造物は近代化しましたが、山陽道と伝統行事である高森天満宮の天神祭の賑わいは、現在のまちなみにも当時の面影を思い浮かべることができます。



昭和中期の玖西盆地（岩国市蔵）

山陽道北側の比叡神社や玖珂・岩隈八幡宮のある地区は、現在は宅地化が進んでいますが、比叡神社を中心とした農業集落の営みの中で育まれてきた谷津神楽舞は、現在も集落の人々の繋がりとして大切にされています。

玖西盆地南部の祖生地区は、島田川流域の平地が広がる古くから米作りの盛んな田園地区で、その営みの中で受け継がれてきた柱松行事は、現在も地区の人々の誇りとして夏の夜を照らしています。



昭和初期の高森のまちなみ（岩国市蔵）



現在の周東のまちなみ



高森本陣跡



周防祖生の柱松石碑

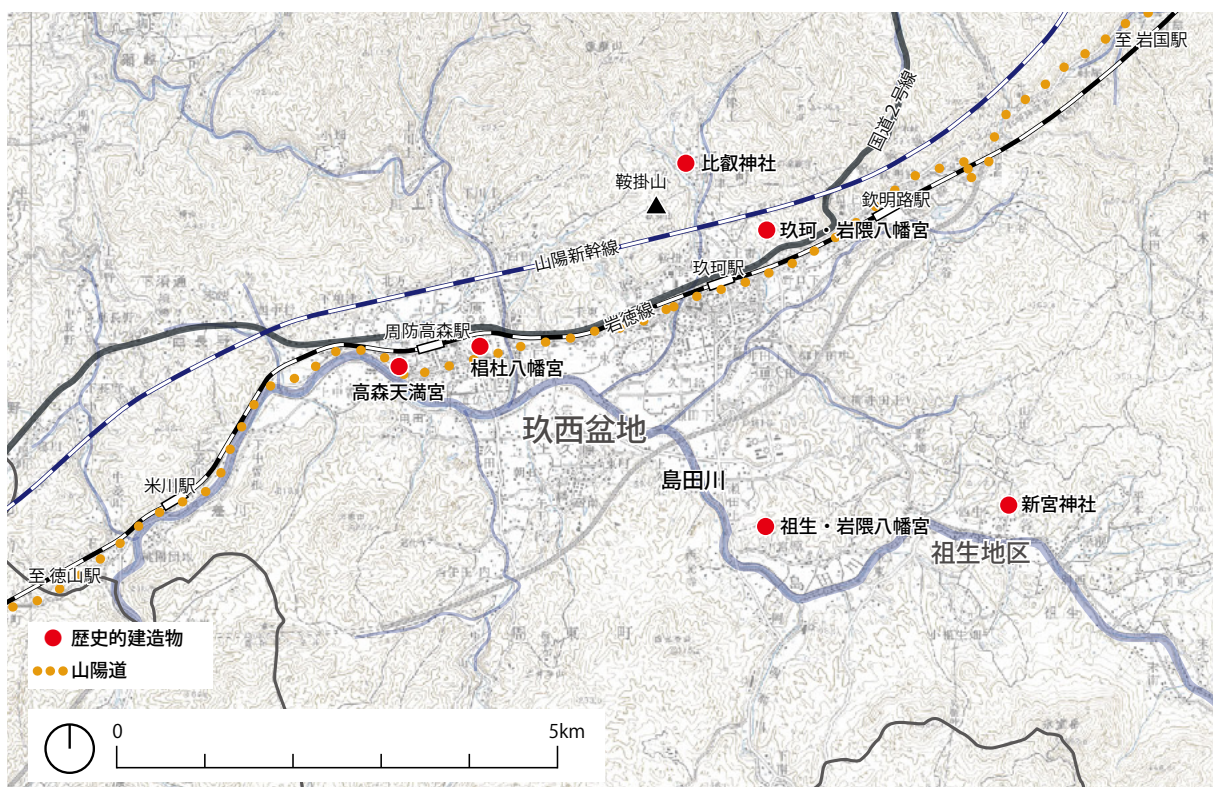


図2-32 玖西盆地と建造物の位置

2) 玖西盆地の伝統行事に関わる建造物

① 比叡神社

建築年代：明治13年（1880）以前（本殿）

比叡神社は、延暦24年（805）に日吉神社（滋賀県）より分霊を迎えたことがはじまりと伝えられる歴史ある氏神社です。

参道入口には、安政4年（1857）の刻銘のある狂歌碑^{きょうか かい}が建ち、参道には寛政、文化、天保年間の石灯籠や鳥居、狛犬、亀の水神等の多くの歴史ある建造物を見ることができます。以前は流鏑馬^{やぶさめ}神事も行われていた約140mに及ぶ直線の参道は例祭の神楽舞のほかに桜並木が有名で、花見の季節には多くの人が訪れます。参道を進むと、樹齢1,000年と言われる高さ30mを超える大杉が立ち、比叡神社参拝の唯一の経路となる222段の石段が現れます。本殿は明治13年（1880）の神社明細書にその記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。拝殿はその老朽化から昭和58年（1983）に建替えられましたが、瑞垣^{みずがき}（板塀）に囲まれた歴史的重みを兼ね備えた本殿が変わらぬ姿のまま鎮座しています。比叡神社例祭において、参道で谷津神楽舞が舞われます。



比叡神社 参道入口、狂歌碑（安政4年（1857））



比叡神社 参道



比叡神社 大杉と狛犬



比叡神社 石段



比叡神社・拝殿



比叡神社・本殿

く が いわくまはちまんぐう
②玖珂・岩隈八幡宮

建築年代：明治13年（1880）以前（拝殿、本殿）

玖珂・岩隈八幡宮は、玖珂地域にある神社です。

大鳥居に刻まれている銘文には、元禄4年（1692）に吉川家領主によって祖生・岩隈八幡宮を山陽道沿いのこの地に遷宮されたことが記されています。そのため、元禄6年（1694）の大鳥居の造営をはじめとして吉川家から社殿の造営や修繕の庇護を受けました。

山陽道と玖珂・岩隈八幡宮の間にJR岩徳線と国道2号が開通したことによる地形の変更によって、参道の形態も昭和初期の写真から変わってはいますが、元禄年間の大鳥居を初めとして、文化、慶応、明治、大正年間の石灯籠や狛犬を約430mの参道の各所で見ることができます。

本殿は、明治13年（1880）の神社明細書にその記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。昭和初期に檜皮葺から銅板葺に改修されていますが、朱塗りの流麗な三間社流造の本殿は岩国市内最大規模のものです。昭和初期の古写真も残されています。

例年5月3日の神楽の日には拝殿前の参道において谷津神楽舞を観る人が詰めかけます。



昭和初期の玖珂・岩隈八幡宮参道入口（岩隈八幡宮提供）



昭和初期の玖珂・岩隈八幡宮拝殿、本殿（岩隈八幡宮提供）



山陽道からの参道入口（現在は国道2号が横断）



現在の参道と大鳥居（元禄6年（1693））



玖珂・岩隈八幡宮拝殿、本殿



玖珂・岩隈八幡宮本殿

すぎのもりはちまんぐう

③ 梶杜八幡宮

建築年代：明治13年（1880）以前（社殿）

梶杜八幡宮は、玖西盆地の西側に位置する神社です。

鎌倉時代に鎌倉幕府の地頭としてこの地に赴任した梶杜氏の先祖が鎌倉鶴岡八幡宮を勧請したことが梶杜八幡宮のはじまりと伝えられています。社殿は明治13年（1880）の神社明細書にその記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。

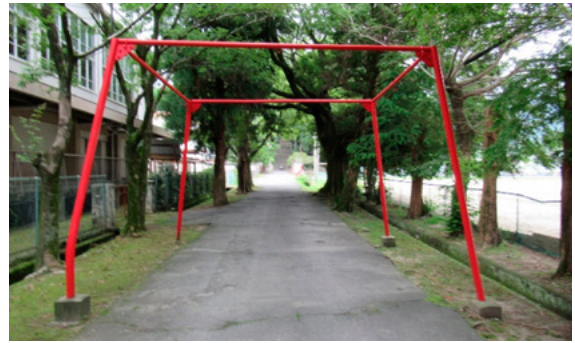
昔、秋の収穫祭には流鏝馬が行われていた約180mにもおよぶ参道には文化5年（1808）の刻銘のある狛犬をはじめ、元禄、文化、文政、文久から明治時代に至る多くの石灯籠や狛犬があり、現在では貴重な木製の神馬も祀られています。

梶杜八幡宮と高森天満宮は本社と摂社の関係にあることから、梶杜八幡宮の参道には高森天満宮の御旅所があり、天神祭の際には神事が行われます。また、神社の境内へと続く112段の石段は以前には中学校が隣接していたため、運動部の鍛錬の場ともなっていたこともあり、地域の人々に広く親しまれています。

梶杜八幡宮と高森天満宮を結ぶ範囲で、高森天満宮天神祭が行われます。



梶杜八幡宮参道入口



高森天満宮・天神祭御旅所



参道の狛犬（文化5年（1808））



梶杜八幡宮112段の石段



梶杜八幡宮の神馬



梶杜八幡宮・社殿

たかもりてんまぐう
④高森天満宮

建築年代：昭和36年（1961）社殿改築

高森天満宮は、玖西盆地の西側に位置する神社です。

明治元年（1867）の頃に通化寺（周東町上久原）の23代住職であった戒文禪師^{かいもん}が隠居して総持寺^{そうじじ}があった当地に寺子屋を開いた際に、学問の神として崇拝される菅原道真^{すがわらのみちざね}の座像を通化寺から移したことが高森天満宮の創始と伝えられています。

境内には戒文禪師之石碑（昭和9年（1934））、天保年間の石碑や昭和10年（1935）の鳥居も見ることができ、現在の社殿は鉄筋コンクリート造で昭和36年（1961）に改築されたもので、境内にはその石碑も見られます。壁や柱の白と朱色塗装、銅葺き屋根の緑青の色彩、そして社殿前に鎮座する御神牛^{ごしんぎゅう}像が天満宮の形態をよく表しています。高森天満宮と梶杜八幡宮を結ぶ範囲で、高森天満宮天神祭が行われます。



島田川と改築前の高森天満宮（昭和初期、岩国市蔵）



改築前の高森天満宮と市街地（昭和中期、岩国市蔵）



現在の高森天満宮拝殿



御神牛像



昭和36年（1961）改築記念石碑



戒文禪師之石碑

しんぐう
⑤新宮神社

建築年代：明治13年（1880）以前（拝殿、神殿）

新宮神社は、玖西盆地の南、祖生地区にある神社です。

鎌倉時代の嘉禄元年（1225）に新宮大明神として鎮座し、室町時代の大内氏、安土桃山時代の毛利氏、江戸時代の吉川家によって庇護されてきたと伝わります。祖生の平畑地区、別所畑地区、末元地区の氏神です。

社殿は、明治13年（1880）の神社明細書に記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。

享保20年（1735）の刻銘のある大鳥居をくぐって、石段を登ると3間×5間の向拝を持つ拝殿が現れ、その奥に銅板葺の三間社流造の神殿が鎮座しています。集落に近接しており、記録の管理や樹々や建物の手入れも行き届いています。

周防祖生の柱松行事において、新宮神社の宮司により神事が行われます。



享保20年（1735）建立の大鳥居



境内へ続く石段



新宮神社拝殿



新宮神社神殿

そ お いわくまはちまんぐう
⑥祖生・岩隈八幡宮

建築年代：明治13年（1880）以前（神殿）

祖生・岩隈八幡宮は、玖西盆地の南、祖生地区にある神社です。

元々は熊毛宮くまけのみやといわれていたものに、和銅7年（714）に豊前国（現在の大分県宇佐市）宇佐八幡宮から分霊を迎えたため岩熊八幡宮と改称され、岩隈山にあったことにより岩隈八幡宮と改められて祖生の地に鎮座していましたが、元禄4年（1692）に吉川家領主によって玖珂くじゅうさんの九重山の地に移されました。その後、宝永年間（1704～1711）に社が再建されて新岩隈八幡宮と呼ばれていましたが、昭和2年（1927）に岩隈八幡宮と改称されたと伝わります。祖生の山田地区やまだ、落合地区おちあい、下祖生地区しもそおの氏神です。

県道115号（通津周東線）に面した参道入口の石段を約30m登った先に寛延元年（1748）の刻銘のある石鳥居が現れます。その先にある石段を約17m昇ると文政年間（1818～1830）から明治時代の石柱や灯籠、狛犬等が多数ある中、拝殿と神殿を目にすることができます。

現在の神殿は慶応4年（1868）の火災による焼失後の明治2年（1869）に吉川家による資材の奉納によって再建されたものとされ、明治13年（1880）の神社明細書に記載があり、各部材の経年変化の状態からもそれ以前の建築と推定されます。銅板葺の三間社流造の建物です。

周防祖生の柱松行事において、祖生・岩隈八幡宮の宮司により神事が行われます。



祖生・岩隈八幡宮参道入口の石段



寛延元年（1748）に建立された道内の鳥居



祖生・岩隈八幡宮拝殿



祖生・岩隈八幡宮神殿

(3) 玖西盆地の伝統行事に関わる人々の活動

1) 谷津神楽舞^{やつ}

【市指定無形民俗文化財】

谷津神楽舞は、江戸時代末期の大飢饉の頃に人々が五穀豊穡を願う中で、岩国行波の神舞が玖西盆地に伝わったものといわれており、田や広場に^{かんどん}神殿といわれる仮設の舞場を造って舞われる神楽舞です。明治時代まではこの地域には2つの神楽集団があり、^{さんのうぐう}山王宮（現在の比叡神社）に奉納されてきたと伝えられています。

昭和初期からは、比叡神社の例祭の他に玖珂・岩隈八幡宮において5月3日の神楽の日として岩隈八幡宮参道にて舞われるようになっていましたが、昭和26年（1951）にこの地を襲ったルース台風による災害によって、岩隈八幡宮での奉納舞いは継続できましたが、大規模な神殿の建設を伴う比叡神社での奉納は中断されていました。その後、昭和52年（1977）に谷津神楽舞保存会が設立されたことを機に比叡神社での奉納舞も再開されました。



昭和初期の岩隈八幡宮奉納（山根啓史氏提供）



昭和52年（1977）の比叡神社参道奉納（山根啓史氏提供）

4月第2日曜日に開催される比叡神社例祭は、2週間前からしめ縄作り、清掃、神殿の材料調達、切り紙飾りの準備が地域で始まり、前日の土曜日に神殿をつくり、天蓋や切り紙の飾り付けが行われます。そして、前夜祭において湯立が舞われます。例祭当日は、谷津神楽舞の奉納以外にも、神楽鍋が振舞われ、早朝からついた餅の餅まきも行われ、多くの人で賑わいます。

年末年始を除いた毎週、土曜日の夜に^{やつかみ}谷津上公会堂では、後進育成のために保存会発足時から週末には舞や楽の練習が続けられています。その音色は集落に響き、今では集落に欠かせないものとなっています。



神殿と切り紙飾りの中で舞う（比叡神社参道、山根啓史氏提供）



谷津神楽舞（比叡神社参道、山根啓史氏提供）



谷津神楽舞 (岩隈八幡宮拝殿、岩国市蔵)



谷津神楽舞 (岩隈八幡宮拝殿、岩国市蔵)

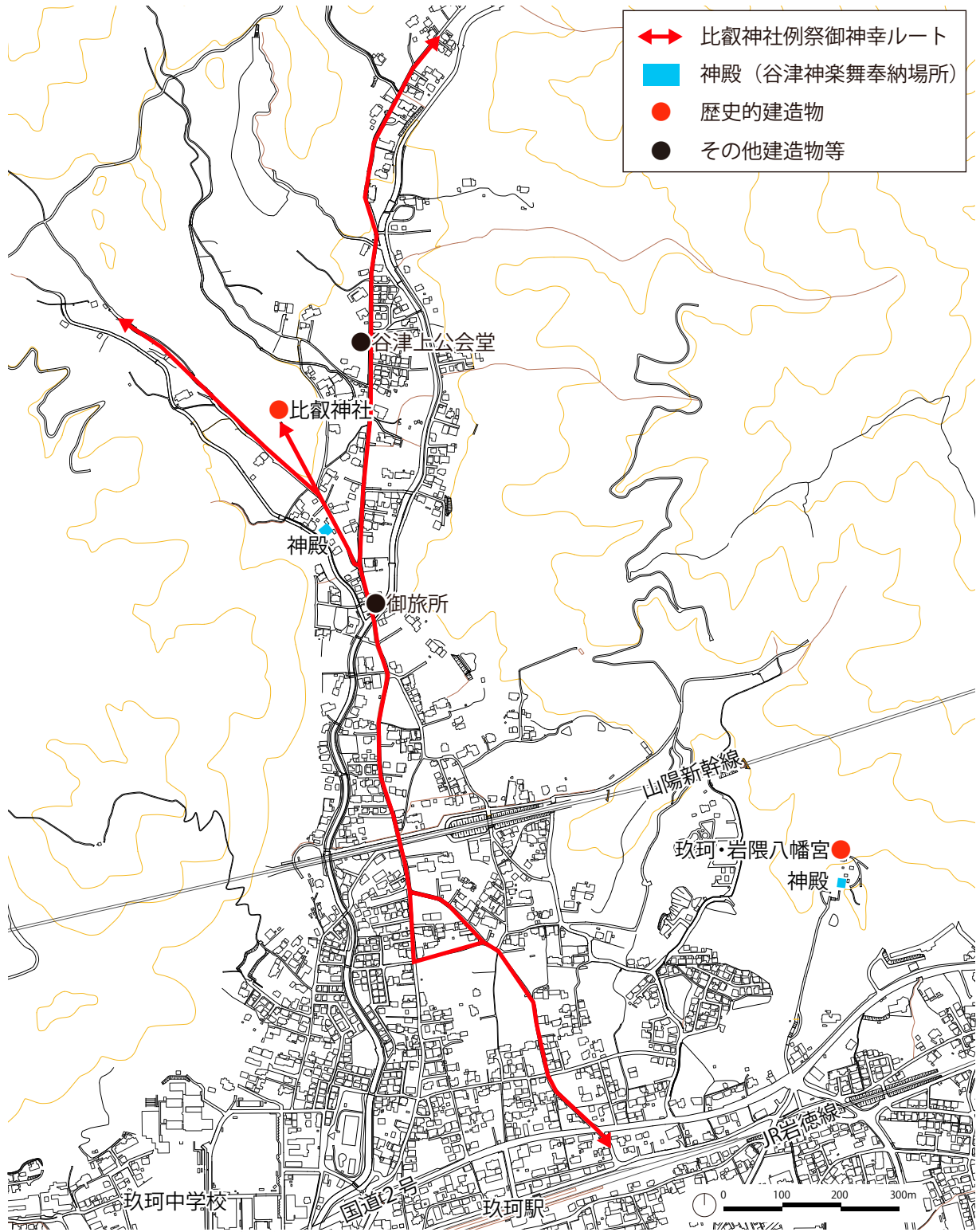


図2-33 谷津神楽舞の活動と建造物

2) 高森天満宮・天神祭

高森天満宮は、防府天満宮、柳井天満宮と並び周防三大天神として地域に親しまれています。天神祭は11月最後の週末の土曜日に開催され、屋台なども多く出店し、多くの人で賑わいます。

祭りでは、裸坊と呼ばれる曳き手が御網代と呼ばれる御霊を入れた車を引き回し、高森天満宮と梶杜八幡宮を往復します。

高森天満宮・天神祭の賑わいを伝えるものとして、昭和初期の古写真が残されています。



天神祭の様子・街道沿い（昭和中期、岩国市蔵）



天神祭の様子・高森天満宮前（昭和中期、岩国市蔵）



裸坊による御網代の引き回し（昭和中期、岩国市蔵）



御網代の出陣の様子（平成14年（2002）、岩国市蔵）



裸坊による御網代の引き回し（令和、高森天満宮提供）

御神幸が行われるルート沿いには、天神祭の一週間前から、町内の軒先にしめ縄と御幣が吊るされ、祭の雰囲気盛り立てます。祭当日の土曜日には、御網代に御霊入れの神事が行われます。夕刻から幟と提灯に先導された御網代が裸坊に引かれ、御神幸の途中で御網代を回転させたりしながら街中を練り歩き、折り返し地点となる梶杜八幡宮の参道内にある御旅所で神事を行い、御網代は高森天満宮へと引き返していきます。

また、日曜日には、ブラスバンドや総踊り、子供神輿などが御神幸ルート上でパレードを行います。



梶杜八幡宮参道内の御旅所での神事 (高森天満宮提供)



梶杜八幡宮参道内御旅所と御網代 (高森天満宮提供)

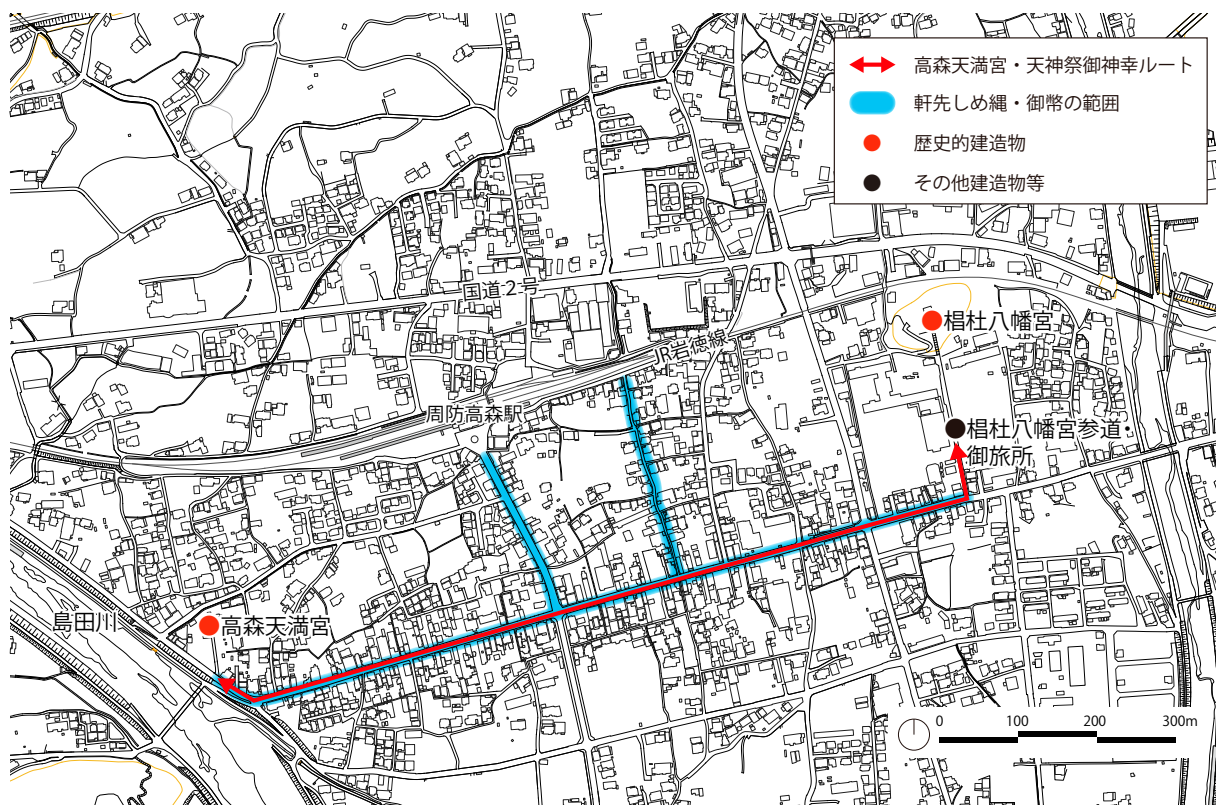


図2-34 高森天満宮・天神祭の御神幸ルート

3) 周防祖生の柱松行事

【重要無形民俗文化財】

周防祖生の柱松行事は、立てた柱の頂上に、小枝と葉で編んだ「ハチ（鉢）」と呼ばれる笠を置き、その上にさした御幣（長旗）をめざして松明を投げ、点火して燃え上がらせる行事です。

江戸時代中期の享保17年（1732）にこの地を襲った虫害による享保の大飢饉や自然災害、流行病による牛や馬の病死に遭遇していた人々の五穀豊穡や害虫駆除、牛馬の安全という思いから行われるようになった神事であると伝わり、享保19年（1734）に祖生の地で柱松の行事が行われたと新宮神社に残されている『^{うぶすなしやしよひかえそうさいりやくき}産土社諸 控 早採 略 記』（享保19年（1734））に記されています。

また、太平洋戦争後の柱松行事は戦死者への鎮魂として灯されたともいわれています。



鉢への松明の投げ上げ（山田柱松保存会提供）



松明の投入で燃える鉢（中村柱松保存会提供）



鉢内の花火に着火した柱松（中村柱松保存会提供）

祖生の柱松は、3地区（^{なかむら}中村地区、山田地区、落合地区）で8月の定められた日に実施されます。当日の朝に氏神神社への参拝を行い、柱松会場にて氏神神社の神主による神事が行われます。柱松は高さ20mの大人用、高さ15mの中学生用、高さ10mの小学生用があり、中村地区では3本、山田地区と落合地区では2本が立てられます。立てられた後は地上からでは分かりませんが、竹と藁で作られる鉢の直径は最大1.5mもあり、その鉢を先端に取り付けた長大な柱松は、直径10cm、長さ60mにもおよぶ藁で編まれた大縄と人力のみで立てられます。鉢の中には^{かんな}鉋くずや花火が入れられ、その鉢に向けて紐で結ばれた火の着いた松明を回しながら投げ上げる光景と鉢が着火した炎の光景が柱松固有の幻想的なものとなります。

このように江戸時代から続く幻想的な伝統行事である祖生の柱松ですが、柱松の組み上げや立て起こしだけでなく、祖生地区では、20年前からの赤松の確保、大縄用のもち米藁の確保、3月に行われる大縄づくり、2週間前から行われる鉢や松明作りとカズラの収集や会場の草刈り・清掃、柱松翌日の片づけ等の膨大な労力が必要な行事でもあります。

そして、急激な人口減少と少子高齢化によって地区の一人ひとりの負担が大きくなっていますが、伝統行事を後世に繋いでいこうとする地区の人々の情熱と力によって支えられています。



昭和中期の地区住民の打合せ（岩国市蔵）



昭和中期の立て起こし（岩国市蔵）



柱松先端の鉢（はち）作り（中村柱松保存会提供）



人力による柱松の立て起こし（落合柱松保存会提供）



柱松の立て起こし状態（中村柱松保存会提供）



松の板を束ねた松明作り（山田柱松保存会提供）

【中村地区の柱松】

例年8月15日の20時から、祖生グラウンドにて開催されます。

それに先がけ、笛と太鼓が流れる中で、地区の氏神である新宮神社の宮司により神事が行われます。

新宮神社参道入口から会場まで手作り提灯が灯され、しゃぎり太鼓（寄せ太鼓）の音と共に盆踊り等の行事が始まり、行事の最後を3本の柱松が飾ります。



手作り提燈 (中村柱松保存会提供)



笛と太鼓が流れる中での神宮神社宮司による神事
(中村柱松保存会提供)

【山田地区の柱松】

例年8月19日20時から、山田^{やま だ はしらまつけいしやう ち}柱松継承地にて開催されます。

それに先がけ、地区の氏神である祖生・岩隈八幡宮の宮司により神事が行われます。

3地区の中でも最小の20戸余りの人々によって実施されています。集落の中にある小高い丘の上で開催されるので、材料搬入や立て起こし作業、火の見守り等に多大な労力を要しますが、その中で燃え上がる2本の柱松の炎には地区の人々の情熱が感じられます。



人力による柱松の立て起こし (山田柱松保存会提供)



山田地区の柱松 (山田柱松保存会提供)

【落合地区の柱松】

例年8月23日20時から、そお小学校近くの落合橋周辺にて開催されます。

それに先がけ、地区の氏神である祖生・岩隈八幡宮の宮司により神事が行われます。

島田川沿いの土手に2本の柱松が立てられるので、島田川を横断する60mに及ぶ大縄を用いた人力による立て起こし作業は30戸にも満たない地区の人々の情熱以外では成しえませんが、島田川の水面に映る柱松を見られるのは落合地区のみです。



赤松の柱への組立前の鉢 (落合柱松保存会提供)



岩隈八幡宮宮司による神事 (落合柱松保存会提供)

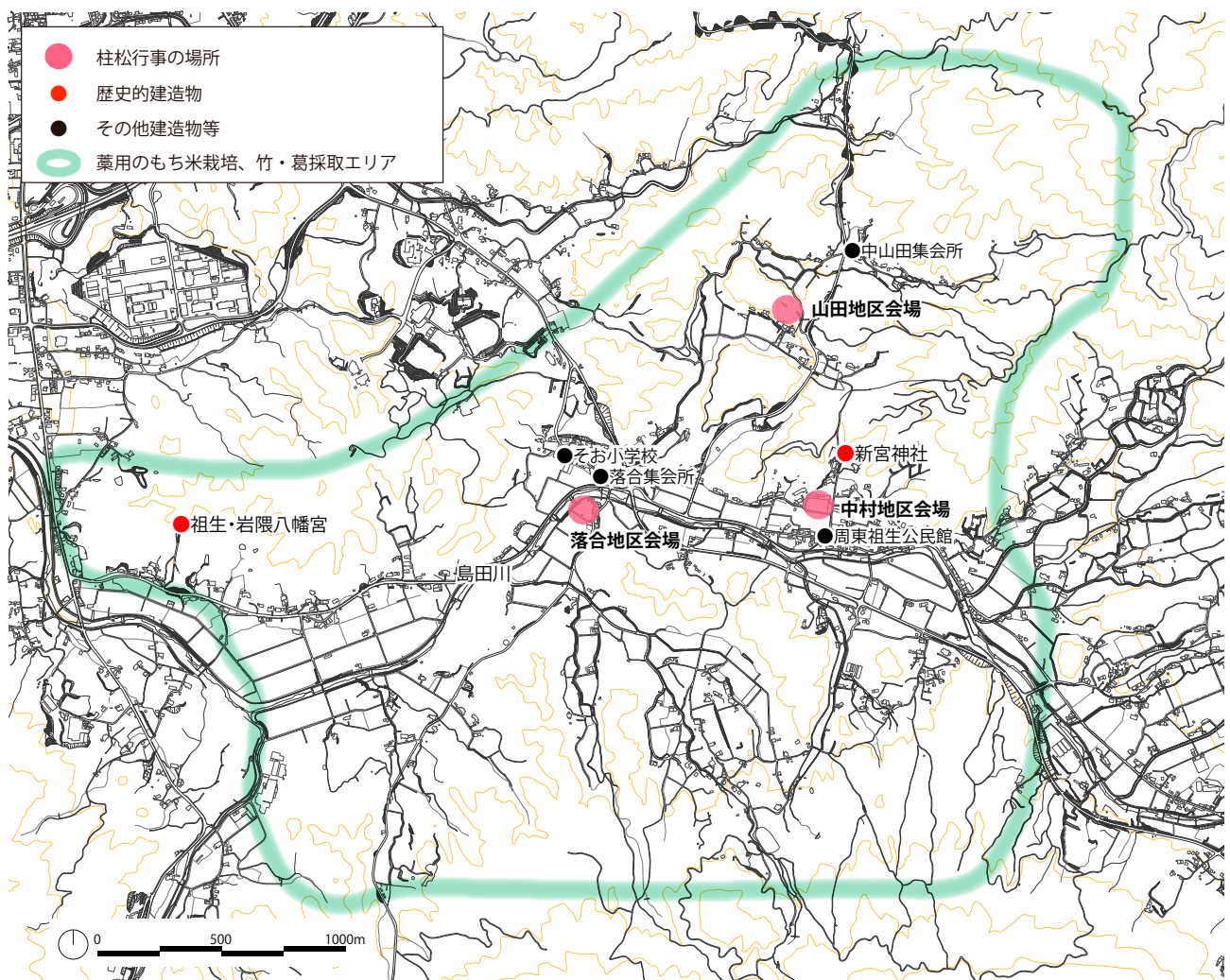


図2-35 周防祖生の柱松行事と歴史的建造物

(4) おわりに

玖西盆地は、かつて山陽道の宿場町として栄えた歴史を持ち、島田川の流域に広がる田園環境の中で、独自の文化が育まれてきました。

比叡神社例祭や玖珂・岩隈八幡宮で舞われる谷津神楽舞は、神殿造りやしめ縄づくりなどの準備から舞まで、地域住民が一体となって行われており、集落のつながりを強く感じさせる芸能であり、神楽の舞が始まると、楽師が奏でる音楽が集落や境内に響きわたります。

高森天満宮の天神祭は、高森天満宮と相杜八幡宮の間、しめ縄と御幣が吊るされた通りにおいて、裸坊たちが豪快に御網代を引き回し、かつて栄えた宿場町の賑わいを今に伝えています。

五穀豊穡や祖先供養の願いを込めて行われる周防祖生の柱松行事は、盆地と島田川によって育まれた田園を背景に、立ち上げられた柱松のまわりを松明が飛び交い、幻想的な景観をつくりだしています。

このように、玖西盆地において今日まで継承されてきた伝統行事は、街道のまちなみや田園と一体となった歴史的風致を形成しています。

